

ギヤスケルは「自分だけの部屋」を望んだのか？

——『北と南』に見るモダンの萌芽

松村豊子

序

ギヤスケルは産業革命による急速な技術革新がもたらす社会的混乱と諸問題を広く世に問う作家として生前は人気を博したが、死後には人気は衰えた。彼女は長編小説5編と伝記1編、そして、多数の中短編を著し、しかも、常に新しいテーマを開拓し続けた。ギヤスケルに対する評価は、しかし、モダニズム時代には作家としてよりも家庭婦人としての姿に焦点を絞り、批評家たちは彼女を「ギヤスケル夫人」と呼んだ。そして、作家像だけでなく作品の面白さが注目を浴びるようになったとは言え、ポスト・モダニズムの今日も彼女の評価は必ずしも高くない。しかしながら、ギヤスケルの作品を「女性」「労働」「ホーム」をキーワードにして読み直すと、『自分だけの部屋』(1929)においてウルフが提唱した、女性が作家になるのに必要な条件である年収500ポンドと「自分だけの部屋」を持つことの重要性をギヤスケルがすでに熟知していたこと、さらに、作家という職業を通して、より広範な社会的な活動を目指していたことが分かる。結婚か仕事かの二者択一でなく、その両方が女性に期待され、労働概念が肉体労働と頭脳労働という単純な分類から感情労働というケアを重視する方向に変容しつつある今日的な視座¹からギヤスケルの作品を読むと、可能性と活力に溢れた極めて動的な世界がそこに展開していることが明らかとなる。

まず、ギヤスケルに対する批評傾向の動向について簡潔に述べる。イギリス小説ではヒロイン像が19世紀末に家庭的な女性から自立を志す「新しい女性」に変容したことは周知のことだが、社会との繋がりよりも個人の内省に着目するモダニストの作家たちが活躍する20世紀になると、ギヤスケルに限らず、社会の全体像を描いたヴィクトリア朝小説そのものが時代遅れとして退けられるようになる。彼らはヴィクトリア朝時代の価値観を否定し、諸々の因習（特に家族関係における）の束縛から解放されることを願い、新たな価値観と解放された世界の優位性を提唱した。そのような状況の中で、社会と人の繋がりを見直し、ヴィクトリア朝小説を再評価したのがデイヴィッド・セシルである。彼は『ヴィクトリア朝前期の小説

家』(1934)においてギヤスケルと同時代のディケンズ、サッカレー、ブロンテ姉妹、ギヤスケル夫人、トロロプ、ジョージ・エリオットを取り上げ、家庭という狭い「女性の領域」への束縛を否定し、自由を希求した彼女たちを「鷲」と呼び絶賛する一方、「女性の品格」(propriety)²を重視したギヤスケルを「鳩」と呼び、彼女を貶め「ギヤスケル夫人」と呼んだ(Cecil 197)。この「鷲」と「鳩」という印象的な比喩表現に影響されてか、E.R. リーヴィスも第二次大戦後に出版した『大いなる伝統』(1948)において、ジョージ・エリオットをディケンズやサッカレーに優る超一流のヴィクトリア朝作家として絶賛する一方、ギヤスケルを真面目な評価に値しない二流作家と位置付ける。彼はディケンズの『ハード・タイムズ』は取り上げるが、これと同じ時期に同じくマンチェスターを舞台にしたギヤスケルの『北と南』には一切言及しない。セシルとリーヴィスのギヤスケル評価に多大な影響を与えたと考えられるのは、現代のフェミニズム批評³にも多大な影響を及ぼすことになるヴァージニア・ウルフの『自分だけの部屋』である。ウルフはここでジェイン・オースティン、ジョージ・エリオット、ブロンテ姉妹に偉大な女性作家として度々言及する一方、ギヤスケルに関しては、単に彼女たちと同時代に活躍した知名度の高い女性作家の1人として冒頭部分において一回言及するのみである。

ウルフは、セシルやリーヴィスと同じように、男性の世界が理解できない家庭婦人という二流作家の烙印をギヤスケルに押したのであろうか。答えは否である。では、何故ウルフは『自分だけの部屋』においてギヤスケルを無視するのであろうか。3つの理由を挙げる事ができる。第1点はウルフが『自分だけの部屋』において女性作家の執筆環境に着目し、ジョージ・エリオットとシャーロット・ブロンテに子供がいなかったこと、また、オースティンとエミリー・ブロンテが未婚であったことに留意し、出産と育児が執筆の障害になるのではないかと疑問を投げかけていることである(*A Room of One's Own* 67)。ウルフは4人の娘を育てる母親であったギヤスケルを上記の条件に合わないために自分の女性作家論から外さざるをえなかったのではないだろうか。第2の理由はウルフが小説批評の基準の1つを、作品に統一を与える個々の作家の強烈なヴィジョンにおいていることである(“Women and Fiction” 136)。作家が実際に生活している社会が父権制であれば、「女性作家が社会に新しい風を吹き込むヴィジョンを描き出すには女性も男性の世界を理解する必要がある。そして、それには両性具有(androgyne)が理想的である」とウルフは言う(*A Room of One's Own* 97)。両性具有となるためには「女性の内に棲みつゝ家庭の天使を絞殺しなければならない」(“Professions for Women” 141)と、ウルフは過激な発

言も辞さない。一方で「女性の品格」を作品において繰り返し提唱するギヤスケルは、独自のものとは言え、「家庭の天使像」を創造する点においてもウルフの尺度から外れるのである。第3の理由は労働者階級に対するギヤスケルとウルフの対照的な反応に求められる。ウルフは女性労働者を対象にした協同組合の会合で講演した際、働く女性たちの逞しい生活力と向上心をシェイクスピアなら喜びそうな題材だと讃えるが、「彼女たちは生活に余裕がない故に視野が狭く、自由な精神が損なわれているため、中産階級と労働者階級を隔てる境界線が消えるには時間がかかる」と断言している（“Memories of a Working Women’s Guild” 153-59）。ウルフは『日記』では労働者階級出身者の粗野な言葉遣いや洗練されない振る舞いに対する嫌悪感を露骨に記しているし、労働者を主人公にすることはなかった。⁴ 他方、ギヤスケルは実生活ではウルフと大差ない経験をしたのかもしれないが、小説の世界では『メアリー・バートン』（1848）の場合から明らかなように、困窮する労働者に共感し、彼らを主人公にすることも厭わなかった。

『自分だけの部屋』はウルフが1928年にケンブリッジ大学の女子学生を対象にした講演原稿を加筆修正したものである。先に引用した「女性とフィクション」（1929）、「女性と職業」（1931）、「女性協同組合の思い出」（1931）はいずれも『自分だけの部屋』と前後して発表されたエッセイである。このように考えると、ウルフは『自分だけの部屋』の執筆・刊行前後の時期に独自の女性作家論と小説論を確立したのであろう。そして、この段階でギヤスケルはウルフの視野から消えたに違いない。実際、ウルフは執筆活動を始めたばかりの頃、ギヤスケルの世界に興味を抱いていた。1910年にE.H. チャドウィックの『ギヤスケル夫人伝』⁵が出版されると、ウルフはその書評（1910年9月29日付け *TLS*）でギヤスケルの労働者に対する姿勢について次のように述べている。

[By] adding detail after detail in this profuse impersonal way she nearly achieves what has not been achieved by all our science. Because they are strange and terrible to us, we always see the poor in stress of some kind, so that the violence of their feeling may break through conventions, and, bringing them rudely into touch with us, do away with the need of subtle understanding. But Mrs Gaskell knows how the poor enjoy themselves; how they visit and gossip and fry bacon and lend each other bits of finery and show off their sores. This is the more remarkable because she was hampered by a refined upbringing and traditions of culture. Her working men and women, her

outspoken and crabbed old family domestics, are generally more vigorous than her ladies and gentlemen, as though a touch of coarseness did her good. ("Mrs Gaskell" 139)

ウルフはこのように労働者の生活を生き生きと克明に描くギヤスケルの筆の冴えを称えている。もともと、ウルフは労働者階級と中産階級の生活文化における差異を越えたい壁ととらえているので、『北と南』(1855)において知性と教養に溢れたヒロインがストライキ中の労働者に暴力行為の制止を促したり、極貧の生活を強いられる彼らの粗末な住まいを訪れる等の行為は想像するのも憚られる脅威であったに違いない。

ウルフはこの書評をシャーロット・ブロンテの「旦那さまや子供たち、そして、文明を捨てて、野蛮と孤独と解放の地へいらっしやい」という誘いに対して、「可哀そうなブロンテさま！」と返答するギヤスケルの言葉("Mrs Gaskell" 140)で結んでいる。このように2人を対比するウルフの真意を前後の文脈から読み取ることにはできないが、ブロンテの孤独感がギヤスケルのそれより理解し易かったことは『自分だけの部屋』におけるウルフのブロンテに対する称賛から明らかである。では、ギヤスケルの孤独感とはどのようなものだったのか。この疑問を解く鍵の1つは『シャーロット・ブロンテの生涯』(1857)におけるブロンテとギヤスケルの対話に求められる。ブロンテはギヤスケル家を訪れ、社交的なギヤスケルの日常生活を直に知ると、『克蘭フォード』のような世界に暮らす中で、周囲の影響なしに「厳しい真実とどのように向き合うのでしょうか」(*The Life of Charlotte Brontë* 505)と呟く。ギヤスケルはこれに直接返答せず、話し手が聞き手の心の奥深くに存在する「秘密の明敏な魂」(your own secret and clear-seeing soul)を既に察知していたと記す。この伝記の前作『北と南』(1855)をヒロインの教養(感情)教育について書かれた小説として読むと、居場所とは無関係に、ギヤスケルの心の中に「女性の品格」を強く求める声とともに抑圧された暗い闇、言い換えると、ブロンテ流の「野蛮」や「孤独」ではないものの、言語化が困難なほど激しく深刻な疎外感があったと推測することができるのである。

以下、『北と南』をヒロインの精神的な成長を描く教養(感情)教育の小説として読み、ヒロイン、マーガレット・ヘイルの自己認識の深化が「労働」及び「自分だけの部屋」の確立と切り離せないこと、また、これら2つの要素がこの作品を他の作品との間に一線を画し、ギヤスケルが幼少期に体験した激しい苦痛と真剣に向

き合っていることについて論じる。まず、マーガレットの性格の特徴を挙げ、次にマーガレットの「自分だけの部屋」とウルフのそれとを比較し、ギヤスケルが既に独自の「自分だけの部屋」を確立していたことを検証する。そして、最後にギヤスケルの権威 (authority) に対する取り組みの姿勢が「鳩」でなく「鷲」のそれと解釈できる可能性について考察する。

1. 労働に励むヒロインの特質

『北と南』をヒロインの成長の物語として読むと、マーガレットがジェイン・エアやマギー・タリヴァーと比べて遜色がない強烈な個性と洞察力に恵まれていることが分かる。19世紀イギリスにおける教養小説の研究の第1人者である川本静子はジョージ・エリオットの『フロス河畔の水車場』(1860)を女性の精神的成長をテーマにした教養小説として読み、マギーの「内」と「外」の軋轢を母親との不和、禁じられた恋、自立という視点から分析し、当時の社会では「主体的自己確立の道を選ぶ時、それは集合的「他」——社会——と相いれない結果とならざるを得ない」(『イギリス教養小説の系譜』112)と言う。また、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』(1847)についても、川本は同様の視点からジェインが「感情」と「理性」ないし「内」と「外」の調和を目指したと言う(『ジェイン・オースティンと娘たち』65)。マーガレットの場合、彼女が18歳の時点から物語が始まり、子供時代がほとんど描かれないうえに、ジェイン・エアやマギー・タリヴァーの成長過程に一貫して見られる「内」と「外」との軋轢という明確なテーマはない。⁶このように、マーガレットの幼少時代からの精神的成長を追うことはできないが、その代わりに、ギヤスケルはマーガレットを頭脳明晰なうえに、家事やケア労働をも辞さない活動的なヒロインとして描き、父母の死と恋の挫折を機に、「自分だけの部屋」で自己の生き方をふり返らせ、新しい道を模索させている。次に、マーガレットの性格の特徴として4点を挙げる。

第1の特徴は、マーガレットが知性と教養に溢れた、極めて活動的な女性であることである。経済的困窮の中、召使の仕事を肩代わりし、労働者のストライキに遭遇する等のような状況に陥っても、育ちの良い良家の子女であるという彼女の自己認識が揺らぐことはない。彼女の強い自信と行動力は彼女の知能がずば抜けていることに起因する。ヴィクトリア朝ではダンテの作品は「究極の恋愛物語」とみなされ、それをイタリア語で読めることは読み手の知性と教育の高さを意味した(シエルストン 38)。マギー・タリヴァーは激情を抑制できず、自己放棄を修得するた

めにトマス・ア・ケンピスの『キリストのまねび』(1420?)を読み耽るのに対し、マーガレットの愛読書は多岐にわたる。彼女は『マシュウ・ヘンリの聖書注釈書』(1708-10)、ワシントン・アーヴィンの『アルハンブラ物語』(1832)、そして、ダンテの『神曲』(1307-21)を読む。彼女が『神曲』をイタリア語の辞書を引き、メモを丁寧に取りながら精読していることがテキストの端々で言及される。『従姉フィリス』(1864)では父親の蔵書を読み漁る読書好きなフィリスがダンテを読めないことを考えると、ギヤスケルは意図的にマーガレットの知性と教養の高さを強調していることが分かる。知性と好奇心、そして、勤勉さの故に、マーガレットは女性のための社交サロンよりも働く男性の世界に魅かれ、男性たち(特にソーントン)の労働環境をめぐる白熱した論議に耳を傾け、時には議論の輪に加わり、自分の意見を語るのである。父ヘイル氏が新興工業都市ミルトンで青年実業家を対象に古典を個人教授していることを考えると、彼女がビジネスに関心を示しても不思議ではない。そして、ギヤスケルはメアリー・バートン他のヒロインとは質を異にするマーガレットの秀でた知能や自由な精神を全面的に肯定しているのである。このことはミルトンの大地主であり、かつ、オックスフォード大学のドンでもあるベル氏が彼女の両親の死後、名付け親として、彼女に全資産を残すことから明らかである。

第2の特徴はマーガレットが労働者階級の労働を厭わないことである。ヘイル氏が牧師職を辞した後、ヘイル家は経済的に切り詰めた生活を余儀なくされる。そのうえ、ヘイル夫人が病床に伏せ、家政婦も歳をとり過ぎていたため、マーガレットが家事全般を取り仕切り、しかも、自ら掃除、洗濯、炊事、買い物もする。マーガレットは10代の大半をロンドンの叔母の家で従姉と一緒に淑女教育(一般的に肉体労働の痕跡を消す教育と言われる)を受けて育ち、この時は父母の元へ戻って間もない。そのことを考えると、彼女が自分を「洗濯女のベギー」と呼ぶのには自嘲の意味が込められていると思われる。階級の違いに拘らず、自分の意志と欲求に応じて自由に行動するマーガレットを「伝達者」(Schor 148)や異なる言語間の「通訳」(Schor 143)と解釈すると、彼女が淑女なら当然嫌がるはずの労働者階級の、つまり、召使いの仕事をも率先してやるのは当然のことと言える。

第3の特徴はマーガレットが家族と家庭を守る、ヴィクトリア朝時代に大いなる幻想を一般に掻き立てた「家庭の天使」(Angel in the House)というよりむしろギヤスケル版家庭の天使と言うべき「力強い慰めの天使」(“strong angel of comfort” 250)として描かれていることである。“comfort”を「慰め」と訳すと、快適な生活環境を連想したくなるが、マーガレットの「慰め」の言動は今日的な言い回しでは「ケ

ア労働」の一環として解釈できるのではないだろうか。彼女の場合、「慰め」の行為は他者を「心の友」(a confidential friend)にするのに欠かせないのである。さらに、相手との間に階級の隔たりがあれば、彼女の行為は相手を思いやる真摯なものになる。例えば、病に伏すヘイル夫人の場合、マーガレットは彼女の傍らに座し、頭を胸に抱き、頬ずりするだけである(41)。ところが、熟練工であるヒギンズの家を訪れ、長年の工場労働のせいで綿肺症を患うベッシーを見舞う時は、彼女の頭を胸に抱き、髪をこめかみからかき上げ、水で湿らせた布で優しく額を撫でる(91)。また、極貧生活を送る貧乏で子沢山のポウチャーの自殺による死を彼の妻に伝える時、マーガレットは細心の注意を払う。まず、ドアに鍵をかけ、野次馬の視線と声を遮り、その後、狂乱状態にある彼女をゆっくりと椅子に座らせ、一番幼い子供を彼女の腕に抱かせ、彼女が母親としての感覚を取り戻した後、マーガレットは彼女の腕に手をそっと置き、自分に注意を向けさせ、相手の眼を見つめ、「可哀想な坊や！お父様の秘蔵っ子だったのよね」(296)と、一言で、彼女に夫の死を悟らせるのである。マーガレットは「慰め」の行為によって、相手の心を開き、本来知るはずもなかった労働者階級の窮状に共感できるようになる。マーガレットがポウチャー夫人に夫の死を告げる場面の描写の巧みさにはウルフも脱帽している(“Mrs Gaskell” 139)。

第4の特徴はマーガレットが自分の性的欲望を認識するのに慎重なことである。彼女はレノックスとソーントンからプロポーズされる。レノックスの場合、彼女は自分が結婚の対象になるという認識を否定し、彼の心の痛みに気付くことさえ避けようとする結果、彼の死を幻の形で見る。ソーントンの場合は、初めに反発と誤解、次に後悔、最終的に和解という当時の常套的な結婚のプロットに発展する。手短に一連の出来事を紹介すると次のようになる。事の発端はストライキ中に、彼女が暴徒に取り巻かれるソーントンを気遣うあまり、暴徒集団の眼前で弱者ではなく権威ある大人である彼をまるで幼子でもあるかのように身を以って庇ったことである。彼女は後にその行為が世間では破廉恥な振る舞い、あるいは、公然の愛の告白を意味することを知り、悶々と悩む。ソーントンはすぐにプロポーズするが、彼女は断る。興味深いのはその後の2人の反応である。ソーントンはある男性(実は彼女の兄)を彼女の恋人だと勘違いし、彼の夢の中では彼女が聖女から彼を誘惑し滅ぼす悪女に変身する。一方、マーガレットは警察に追われる兄を救うために、兄の不在を警察に偽証する。治安判事でもあるソーントンは彼女の偽証を知りながら、彼女について墮落した女性という悪評が立つのを避けるため、嘘を見過ごす。その後、マーガレットは「嘘」をついた理由と、ソーントンが彼女の恋人だと思い込ん

でいる男性が兄であるという事実を「女性の品格」を失わないで彼にどのように伝えようかと悩む。結局、2人の共通の「心の友」となるヒギンズが最終的にソーントンの誤解をとぎ、再会した2人はビジネス・パートナーとなる契約を交わすと同時に、暗黙の裡に結婚の約束をする。このロマンスは2人が事実関係について確認せず、また、互いに相手への思慕を直接伝えないにもかかわらず、「嘘、秘密、沈黙」⁷が功を奏し、ハッピー・エンドとなる。ギヤスケルは沈黙が言葉よりも効果がある時と場所を熟知していたのである。しかしながら、マーガレットが性と階級における違いを超え、精力的に活動するためには、心身の疲れを癒す休息と、静かに思考することによって内的混乱を鎮め、新しい生き方を見つける時間と空間、即ち「自分だけの部屋」が必要なことは自明である。

2. 内省に耽るマーガレット

マーガレットが「自分だけの部屋」で静かに内省に耽ることに関して興味深いことは、この時期が彼女の近親者(父母とベル氏)の死の時期と重なることである。『北と南』は周知のように1854年9月から翌年1月にかけて週刊雑誌『家庭のこぼ』(*The Household Words* 1850-59)に連載小説として発表されたが、ギヤスケルは連載終盤の54年12月に、同誌の編集主幹であるディケンズに宛てた手紙の中で「この作品に『北と南』よりも良い題名をつけたとしたら、それは『死と変化』(Death and Variations) だったでしょう」(Letters 324)と述べている。⁸ 労働に励むヒロインではなく内省に耽るヒロインに焦点を絞るならば、作品の題名は当然「死と変化」になったであろうと思われるほど、ギヤスケルはマーガレットの内面的な変化を注視している。近親者の死はマーガレットを家族のしがらみから解放すると同時に、自立の道へ急がせるのである(Matus 36)。

では、父母とベル氏のそれぞれの死後、マーガレットは「自分だけの部屋」をどのように確立するのであろうか。彼女は4段階を経て、自立した女性の生き方を選ぶのである。

まず、母の病気と死がマーガレットに与える影響について述べる。マーガレットは病人の看護に加えて、父をも慰める。空気汚染が酷いミルトンの環境が養生に適さないことは否めないの、彼はミルトンに移り住むことを決めた自分を激しく責めていた。マーガレットは母の看護と気弱になった父を支えるのに加え、母の最期の願いを聞き入れ、国外追放の罪に問われる兄を密かに家庭に迎え入れ、母の死後再び無事に国外へ送り出しさえる。この間の負担は明らかに彼女には耐えきれな

いほど重い。彼女は兄の帰国が露見しないように警察に偽証し終え、書斎で1人になるや否や、「突如、信仰心が崩れ」しばらくの間意識を失う。ギヤスケルはここでダンテの『新生』(1923)の一節⁹を引用し、死の淵から「助け」を求める彼女に「聖霊の息吹」を与える。すると、マーガレットは目を閉じたまま、生気を取り戻し、「弱さの痕跡を一切消し去り、いつもの自分に戻りたいという直感的な欲望」(277)に従い、ゆっくりと身を起こす。蘇生後の彼女がどのように自己に対する認識を深めるのか。この時点では彼女がある種の記憶喪失に陥っていることが仄めかされるだけである。突然信仰心が崩れ、卒倒するに至った細かい経緯について、彼女は兄の身の危険と彼を救おうとして嘘をついたこと以外は「何も思い出すことができない」(277)のである。

マーガレットが自分の心と向き合い、しっかりと見つめ始めるのは、母の葬儀後、父親が気分転換のためにオックスフォードへ出発し、居間で寛ぐ時である。

It was astonishing, almost stunning, to feel herself so much at liberty; no one depending on her for cheering care, if not for positive happiness; no invalid to plan and think for; she might be idle, and silent, and forgetful,—and what seemed worth more than all the other privileges—she might be unhappy if she liked. (344)

これはマーガレットに初めて静かな思考の世界が開く時の描写である。彼女は「望めば不幸な気分になることさえできる」と素直に「解放感」と「安堵感」を表現しているが、居間で1人になると、寛ぎ、沈黙し、何時間も時が経つのも忘れて物思いに耽る。四六時中働くのが習慣化している彼女は、無為な時間を最高の贅沢と考え、それまで「暗い戸棚」にしっかり仕舞い込んでいた自分自身の心配事を1つ1つ取り出し、吟味し、それらが彼女自身の人生にどのような意味をもつのかについて熟考する。マーガレットが通常の日常生活では意識することのない自分自身の心と向き合うには、暴徒の中に衝動的に駆け出すよりもさらに「揺るがない」決意と、1人になれる時間と空間が必要だったのである。

次に父ヘイル氏の死が彼女に及ぼす影響について述べる。彼は旅先のオックスフォードで亡くなり、その地に埋葬されるので、マーガレットに身体的な負担はない。この時期に彼女が瞑想と夢想に耽る場所は、生まれ故郷ヘルストンのかつて暮らしした家、そして、地元のホテルの1室である。彼女は現在牧師館に暮らす、禁酒主義運動に傾倒する新しい牧師と教育熱心な彼の妻の暮らしぶりが以前のヘイル一家と

全く異なることを知り、過去へは戻れないこと、また、時代の変化を受け入れざるを得ないことを悟る。この時、彼女は世界の無常を悟り、カトリックに入信し、尼となるという考えも一瞬頭をよぎるが、身近な人びとへの愛情を完全に断つことはできないという結論に至る。そして、絶えず気持ちが変化する彼女自身を肯定的に受け止め、「現実が想像したよりも美しいことを発見」する(401)。彼女はそれまで抑圧していたソーントンへの愛情を認め、「女性の品格」を保ちつつ、彼の誤解を解くことをベル氏に依頼する。これ以降、ベル氏が彼女の必要経費すべてを負担し、彼女は寄留しているロンドンの従姉夫婦の住まいの一角に「自分だけの部屋」を確保する。

では、ベル氏がマーガレットに全資産を遺す段階では、彼女の思考のための空間である「自分だけの部屋」はどう変わるのか。彼女はベル氏に所謂恋路の指南役を期待していたので、彼女にとって、彼の死は結婚への道を断たれることを意味する。ロンドンの社交界の怠惰な生活に満たされず、避暑地へ出かけると、彼女はそこの浜辺に1人座り、ひたすらに繰り返す波の動きを見つめ、その音に耳をすませる。

She used to sit long hours upon the beach, gazing intently on the waves as they chafed with perpetual motion against the pebbly shore, —or she looked out upon the more distant heave, and sparkle against the sky, and heard, without being conscious of hearing, the eternal psalm, which went up continually. She was soothed without knowing how or why. (414-15)

これは彼女が絶えず変化する波の動きに目を凝らし、その音に耳をすまし、時の流れを感覚的にとらえ、無言のうちに生を享受している姿の描写である。波の描写と言うとウルフの『波』(1931)を連想するが、ギヤスケルの描く「波」は因習から解放されたウルフの「意識の流れ」ではなく、「賛美歌」が穏やかに響き、彼女の心を癒し、心の深層に迫る内省を促すのである。彼女は自分の過去と未来を繋ぐ原因と意義を見出し、起死回生を目指す新しい生き方に覚醒する。ロンドンに戻ると、彼女は自立した人生を選ぶことを従姉夫婦と叔母に宣言する。

マーガレットはこのように近親者の相次ぐ死の後、莫大な遺産の相続者として、働く必要がなくなる。この時点で興味深いことは彼女が「自分だけの部屋」で内省に耽っている間、労働の世界の物語を牽引しているのが工場主のソーントンとそこの工場で働くヒギンズであり、工場がストライキの煽りで経営破綻の危機に瀕して

いることである。『北と南』はマーガレットが土地の所有者として、また、投資家としてソーントンに巨額の資金援助を申し出て、彼がそれを受諾する場面で終わる。勿論、この契約締結の事務処理中に、第1章で先述したように、2人間の誤解がとけ、恋が実ることも示唆される。つまり、マーガレットの「自分だけの部屋」は彼女の再生に不可欠な生氣回復と思考の場であるだけでなく、間接的にはあるが、物語の劇的展開に必要な要素となるのである。ストーンマンも指摘するように、ギヤスケルの作品では働く女性に概して焦点が絞られ、労働は決して「苦難や苦痛」でなく、「自信と相互支援」を培う主要な媒体なのである (Stoneman 31)。

3. ギヤスケルの「自分だけの部屋」をめぐる言説

ところで、ギヤスケルの「自分だけの部屋」はどのように評価されているのか。以下は欧米を中心とした女性作家の執筆環境を比較検討したショウォールターの『女性自身の文学』からの引用である。

This generation [Mrs. Oliphant, Mrs. Linton, Mrs. Gaskell] would not have wanted an office or even “a room of one’s own”; it was essential that the writing be carried out in the home, and that it be only one among the numerous and interruptible household tasks of the true woman. Mrs. Gaskell wrote in her dining-room with its four doors opening out to all parts of the house. (Showalter 85)

ショウォールターによると、ギヤスケルは同世代のオリファント夫人やリントン夫人と同じように、主婦業の傍ら執筆活動に励む大衆作家の1人に位置付けられ、四方に家中に通じる扉のある食堂で執筆活動していたことになる。とは言い、『北と南』を執筆当時、ギヤスケルは自立志向が強いシャーロット・ブロンテやフローレンス・ナイチンゲールと親交を結び、女性の自立について真剣に考えていたようだ。この作品の題名について、自分の考えをディケンズに手紙で知らせる頃には、マンチェスターから遠く離れた場所に執筆場所を探していたようだ (Uglow 343)。実際、『北と南』の大半は広大なナイチンゲール家の一角で外部の邪魔なく執筆された。¹⁰『北と南』を読む限り、「自分だけの部屋」の有無は女性作家による作品の質と内容を定める主要な指標の1つと言えるのである。

結び

以上、『北と南』のヒロインの成長に「自分だけの部屋」が欠かせないことを検証した。最後に、この作品を教養（感情）教育について書かれた小説として読みこむことで明らかになる点を2つ指摘し結びとする。

第1点はギヤスケルが労働への見方を「卑しいもの」から「佳きもの」へ変化させていることである。彼女はヒロインの生き方を通して、頭脳労働、肉体労働、そして、ケア労働を巧みに描き分けるだけでなく、労働の質的向上のために「自分だけの部屋」という自由な思索の空間が必要であることさえ読者に訴えている。ギヤスケルは労働を介して形成される信頼関係の重要性と将来的な可能性を信じていたのである。『北と南』ではヘイル氏は英国国教会から離れ、フレデリックは海軍法を犯し、カトリックに改宗し、マーガレットは警察に偽証し、ソートンも治安判事の立場にありながら、彼女の偽証を見逃す。ギヤスケルがこのような権威の再構築に挑戦した理由は「いかなる組織・制度も異なる階級の個々人が個人的に付き合わない限り機能しない」（432）というソートンの台詞が示唆するように、彼女が性、階級、そして、宗教における違いを超えた平等と平和を願っていたためと考えられる。ヘイル氏（非国教徒）とマーガレット（国教徒）がヒギンズ（不信心者）を家族の祈祷に誘う場面（233）はこの祈願がなければ描かれなかったに違いない。

第2点は第1章の冒頭で述べたように書かれなかった子供時代が暗示する、幼少期の深刻な疎外感である。ここではマーガレットの精神的成長を時の経過を追って語るのに欠かせない幼少期の記憶が無いにも等しい。思索に耽る時でさえ、「高慢になったのは幼少期に他人から愛情ある理解を得られなかったから」（417）と、彼女は深刻なはずの疎外感を一言で終らせる。ボナパルトはギヤスケルが幼少期に近親者を次々と喪失してしまった激しい苦痛をいくつになっても常に忘れたことはなかったと言う（Bonaparte 15）。ギヤスケルが幼少期に感じた孤独感と疎外感は、彼女がシャーロット・ブロンテやジョージ・エリオットと同じ手法でヒロインの精神的成長を描くのを妨げるほど耐え難いトラウマだったに違いない。マーガレットが愚痴や涙を一切こぼさず、女王然として労働に励む姿から、他者に認められ、受け入れられようと一心不乱に勉強に励む少女時代の作家の傷ついた心を読み取るのは難しくはない。この教養小説では、他者に対するケア労働によって、自分自身の幼少期のトラウマを果敢に乗り越える女性の姿が描かれているのである。

ウルフを筆頭とするモダニストたちはギヤスケルの労働に対する姿勢を未熟だと判断し、彼女を時代に迎合する「鳩」と呼んだ。しかし、労働に関するイデオロギ

一が「仕事の獲得」から「仕事の創出」へと大きく変容しつつある今日（フロリダ400）、既成の文化的な枠組みから解放された人と人との関係を作品において描出したギヤスケルを「驚」として再評価することは可能になったのである。

注

*本稿は日本ギヤスケル協会第28回大会（2016年10月1日、於東北大学東京分室）におけるシンポジウム「モダンの萌芽を探して—女性、労働、ホーム」における研究発表「ギヤスケルは「自分だけの部屋」を望んだのか」に加筆したものである。

1. 感情労働は主としてIT革命により労働におけるコミュニケーション領域の拡充後に注目されるようになった労働分野であり、感情に労働の負荷が大きく作用するのが特徴である。感情労働に従事する職種としては情報処理・サービス業に限らず、ケア労働である医療職や介護・保育職も含まれる。性別分業（男性＝賃金労働、女性＝家事労働）の解体後に、家事労働がケア労働として焦点化され、「ケアの社会化」につながったことについては山根純佳『なぜ女性はケア労働をするのか』を参照。
2. 1860年代前半に一世を風靡したセンセーション小説では家庭の平和を守る女性とは対照的に、あるべき女性の規範から逸脱した女性の言動（重婚、駆け落ち、子殺し等）が描かれた。これらの小説のヒロインには“improper”という形容詞がつけられることが多かった。ギヤスケルはこのようなヒロインとは一線を画した、真の意味での解放された女性の像を描いているので“propriety”を「女性の品格」と訳した。
3. 1950年代以降の批評傾向については、ストーンマンの『エリザベス・ギヤスケル』第1章「エリザベス・ギヤスケルを読む」で簡潔に紹介されているので、ここでは省略する。
4. 『日記』を読むと、ウルフが住み込みの家政婦と長期にわたり度々静いをおこし、家政婦が住み込みでなく通いになると安堵していること、また、ロンドンの郊外に購入したモンクス・ハウスの近隣に住む労働者との付き合いに辟易していることが随所で明らかになる。
5. 1910年に出版された『ギヤスケル夫人伝』は作品紹介が乏しく、観光案内に近いものだったらしい。チャドウィックはこれに加筆し、3年後の1913年に作品紹介を含めた『ギヤスケル夫人：ゆかりの地、ホーム、物語』として出版した（Chadwick vii）。従って、ウルフが読んだ伝記は現在のものとは内容が異なると思われる。
6. 川本静子は『イギリス教養小説の系譜』でエリオットの『フロス河畔の水車場』を取り上げ、

また、『ジェイン・オースティンと娘たち』でブロンテの『ジェイン・エア』とギヤスケルの『北と南』を取り上げている。マーガレットにジェインやマギーの場合に顕著に顕れる「内」と「外」との相克が明確でないせいも、『北と南』論では紳士理念の再構築に着眼点がおかれている(87)。

7. 『嘘、秘密、沈黙』(*On Lies, Secrets, And Silence* 1979) はアメリカのフェミニスト作家であるリッチの作品である。女性の抑圧された性を的確に表す表現として、題名をそのまま借用した。
8. ギヤスケルが当初この作品の題名を「マーガレット・ヘイル」と考えていたにもかかわらず、ディケンズが「北と南」に変更したことは有名である。もし題名が「死と変化」であったならば、内容は変わったのだろうか? というような疑問が湧くほど、ギヤスケルは近親者の死によって揺れ動くマーガレットの姿を克明に描いている。
9. オックスフォード・ワールド・クラシックス版の注では『新生』15章からの引用となっているが、『筑摩世界文学大系 11 ダンテ』(1973)の野上素一訳では『新生』26章からの引用となる。
10. 『北と南』を執筆中のギヤスケルの地理的な移動についてはユーグロ『エリザベス・ギヤスケル』の第17章及び第18章を参照。

引用文献

- Bonaparte, Felicia. *The Gypsy-Bachelor of Manchester: The Life of Mrs. Gaskell's Demon*. Charlottesville: UP of Virginia, 1992.
- Cecil, David. *The Early Victorian Novelists*. 1934; NY: Harper Collins, 1970.
- Chadwick, Ellis H. *Mrs. Gaskell: Haunts, Homes, and Stories*. London: Sir Isaac Pitman & Sons, 1913.
- Chapple, J.A.V. and Arthur Pollard, eds. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Gaskell, Elizabeth. *North and South*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1998.
- _____. *The Life of Charlotte Brontë*. Ed. Alan Shelston. Harmondsworth: Penguin Books, 1987.
- _____. *The Letters of Mrs. Gaskell*. Ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard. Manchester: Manchester UP, 1966.
- Matus, Jill L. "Mary Barton and North and South." *The Cambridge Companion to Elizabeth Gaskell*. Ed. Jill L. Matus. Cambridge: Cambridge UP, 2007.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. 1948; Harmondsworth: Penguin Books, 1977.

- Schor, Hilary M. *Scheherazade in the Marketplace: Elizabeth Gaskell and the Victorian Novel*. Oxford: Oxford UP, 1992.
- Showalter, Ellaine. *A Literature of Their Own*. Princeton: Princeton UP, 1977.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. 1987; Manchester: Manchester UP, 2006.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*. 1993; London: Faber and Faber, 1999.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own*. London: Penguin Books, 2000.
- _____. "Mrs Gaskell." *Books and Portraits: Some Further Selections from the Literary and Biographical Writings of Virginia Woolf*. Ed. Mary Lyon. NY: Harcourt Brace Jovanovich, 1981.
- _____. "Women and Fiction." *Virginia Woolf: Selected Essays*. Ed. David Bradshaw. Oxford: Oxford UP, 2009.
- _____. "Professions for Women." *Virginia Woolf: Selected Essays*. Ed. David Bradshaw. Oxford: Oxford UP, 2009.
- _____. "Memoirs of A Working Women's Guild." *Virginia Woolf: Selected Essays*. Ed. David Bradshaw. Oxford: Oxford UP, 2007.
- _____. *Selected Diaries*. Ed. Anne Olivier Bell. 1977; London: Vintage Books, 2008.
- 川本静子 『イギリス教養小説の系譜』 研究社、1973.
- _____. 『ジェイン・オースティンと娘たち』 研究社、1984.
- アラン・シェルストン 猪熊恵子 (訳) 「教育——その変革の波のなかで——」 松岡光治 (編) 『ギヤスケルで読むヴィクトリア朝前半の社会と文化』 溪水社、2010.
- リチャード・フロリダ 井口典夫 (訳) 『新クリエイティブ資本論』 ダイアモンド社、2014.
- 山本純佳 『なぜ女性はケア労働をするのか』 勁草書房、2010.
- アドリエヌ・リッチ 大島かおり (訳) 『嘘、秘密、沈黙』 晶文社、1990.

(江戸川大学教授)

Abstract

Gaskell's Literary Approach to "A Room of One's Own":
A Reading of *North and South*

(Symposium: "Modernist Elements in the Works of Elizabeth Gaskell —
Focusing on Women, Labor, and Home." Oct. 1. 2016)

Toyoko MATSUMURA

This paper analyzes Gaskell's motivation to write about women's awareness of feelings under the then-prevalent conditions of mid-Victorian England, as well as the way she represents women's independence, and finally, suggests the possibility of reading Gaskell as "an eagle" instead of "a dove." The widely popular image of Gaskell has been of a beautiful elegant lady writer that dared not violate the feminine code for a long time since modernist disapproval emerged in the early 20th century. Virginia Woolf, as do many others, disregards Gaskell as a minor novelist in *A Room of One's Own*; Woolf takes Gaskell as so domestic and family-oriented that she dares not realize her own wish for a room of her own. However, a reading of *North and South* as the heroine's *bildungsroman* enables us to find Margaret Hale as an unconventional and unique heroine. Compared to Jane Eyre and Maggie Tulliver, Margaret is so highly cultured and so strong-minded that her strict sense of female propriety never corrodes the challenging spirit that urges her to rescue poor helpless working men and women. She always does her best to speak the truth, even in the riot. Because of this, she often creates troubles and falls into difficulties, and is introspective enough to meditate on how to live her own life. The silent Margaret Hale can be thought to be settled in a room of her own, tracing a curious "stream of consciousness" to find a new way of life.

Despite Woolf's criticisms of Gaskell, the latter has already achieved a unique room of her own in *North and South*.